

「血液型気質相関説」の史的評論

—原来復の時代から古川竹二の時代まで—

大村政男*・浮谷秀一**・藤田主一***

A Historical Criticism to the Blood-Temperament Correlation Theory

—From the Period of Dr. K. Hara until Prof. T. Furukawa's—

Masao OHMURA*, Shuuichi UKIYA**, and Shuichi FUJITA***

The first hypothesis suggesting a correlation between ABO four group type and human temperament was argued by Japanese physician Kimata Hara (1816), the student of Professor Emile Freiherr von Dungern of Heidelberg University.

Following Hara's claims, large numbers of survey of blood type was carried out by Imperial Japanese Army Surgeons in attempt of exploring the relations between blood type and soldiers' human, however, these effort failed to find the notable findings.

After 1927, Takeji Furukawa, the professor of the Tokyo Woman's Higher Normal School, based on the questionnaire method, started new approach of correlating blood types and temperament (1927). His findings "Die Erforschung der Temperamente mittels der experimentellen Blutgruppenuntersuchung" was published in "Zeitschrift für die angewandte Psychologie, 31, 1928", and also under the title of "A Study of Temperament and Blood-groups" was published in the Journal of Social Psychology, 4, 1930.

Known as Blood-group and Temperaments Correlation theory, Furukawa's theory was well discussed among the psychologists between 1927 and 1934, however, the fact that his theory does not always fit every cases of individuals, the theory are disappeared from academic circle and public, after the year of his death (1940).

Since 1946, Furukawa theory has been processed by many dilettantes into popular craze, far from its original academism, in the form of such as the means of judging the compatibility of man women, secrets of enhancing love affairs.

Consequently lost academic interest in the domain of professional psychology, the researches regarding the relations between group blood-type and human temperaments or character are contempt by most psychologist. It is important to retrospect from the present contaminated situation of Furukawa Hypothesis and going back to the period of 1927 again and examine the relation between temperament and blood type, or may be considered as physical type.

key words: Blood-Type, Kimata Hara, Takeji Furukawa

1. 問題の発端

ABO式4型の血液型と人間の個性とになんらか

の関連があるのではないかという仮説を首唱した学者は、^{はら きまた}原来復(1882~1922)という医学者である。彼はハイデルベルグ大学のE. F. von Dungernのも

* 日本大学
Nihon University

** 東京富士大学
Tokyo Fuji University

*** 日本体育大学
Nippon Sport Science University

とに留学し、「血液型」という 20 世紀初頭の医学的新知識を吸収した最初の日本人になった。血液型の発見者は、文献上はウィーン大学の K. Landsteiner (1868~1943) とその弟子たちになっているが、松田薫の研究 (『改訂第 2 版「血液型と性格」の社会史』1994) によると、Dungern は A・B・AB そして O (注: のちに O となる) の命名者とされている¹⁾。

原来復は 1911(明治 44)年、当時医学界の指導者であったドイツ・オーストリアに留学したが、1914(大正 3)年 6 月には早くも帰国してしまう。Dungern からヨーロッパに戦火の危機が迫っているから早く帰国したまえ——というアドバイスがあったからである。彼が帰国してから 1 カ月後の 7 月、第 1 次世界大戦が勃発してしまう。わが国は日英同盟 (1902~'21 廃棄) のこともあって、ドイツ・オーストリア側と戦うことになってしまう。この戦争で、わが国の陸海軍は白人社会の走狗になって働くことになるのである²⁾。

ABO 式 4 型の血液型についての広範な調査によって、ヨーロッパの白人に A 型が多く、たまたまヨーロッパに在住していた東洋人に B 型が目立つことがわかってくる。この発見はすぐ白人社会特有の人種差別と結びついていく。そして、それは当時白人社会に広がっていた黄禍思想 (黄人禍) と合流して、A 型人種は優秀で B 型人種は劣等であるという偏見に満ちた優越感を発展させるのである³⁾。

原来復は、帰国してから郷里の長野に帰省して血液型についての研究を続けることになるが、彼の研究の動機づけになったのは血液型による人種差別への反論である。彼が大正 5(1916)年 5 月 31 日付の『信濃毎日新聞』に寄稿したものの一部を原文のまま転載してみよう⁴⁾。

「ある種の猿は幾分の A 成分を持って居るが、一般動物は多く B 成分である。欧米人に B 成分の少なくして日本人に多き理由を以て直に人間の賢愚を

論ずることは酷に失する嫌ひもあるが、性質を異にする点などは余程明瞭なことであらう。此の研究が更に進歩した暁には一家族の遺伝的關係も判然し又進化学上必ずや大なる助けをなすであらう。」

原はこの新聞寄稿に続いて、7 月 25 日付の『医事新聞』954 号に助手の小林栄 (千葉医学士、1888~1952) と連名で「血液ノ類属的構造ニ就テ」と題する長文の論文を掲載している。「血液ノ類属」とは「血液型」ということである⁵⁾。

この論文は新聞に掲載されたものではあるが、世界で最初の血液型個性研究の文献である。人間の個性に関連したところを原文のまま抜き出してみる。

実験中此人ハ B ニ非ズヤト思ハル、人ハ多クハ B ナリキ、如何ナル人カト云ヘバ、身体ノ細ク優シサウナル人々ナリキ。

兄弟六人アリテ内五人共ニ A、一人ダケ零 (注: のちの O 型のこと) ナル家族ニ於テ A ノ人々ハ同ジ様ナル性質ヲ有スルモ、零ナル一人ハ全ク異ナル性質ヲ有セリ。

或ル小学校ニテ兄弟一人ガ A ニテ一人ガ B ノモアリテ、此二人ガ又甚シキ性質ノ相違ヲ有セリ、A ノ方ハ柔軟ニテ成績優秀級ノ首席ヲ占ムルニ、B ノ方ハ粗暴ニシテ級ノ最下級ノ成績ヲ有セリ。

以上ノ如キハ恐ク偶然ノ事柄ナランモ、然レドモ特ニスノ如キ点ニツイテ調査セバ興味多キコトト信ズ。

原来復はこのように血液型個性研究の先駆者になったが、10 年後の研究者たちが原の業績を引用していないのは不思議である。

2. 軍隊における血液型個性研究 (I)

大正時代の終わりごろになると、陸軍の軍医たちが兵士の個性と血液型との関連を発表するようになる。彼らの研究の動機づけになったのは、白人社会の偏見に対する反発 (注: B 型の兵士も優秀であるという証拠の提出) と、血液型を応用しての富国強兵策である。しかし、軍医たちの研究は統計法が未発達な時代であることを差し引いてもあまりにも冴えない代物である。

1) 松田はこの本の前 (1991 年) に『「血液型と性格」の社会史』を河出書房新社から出している。

2) 日本は英・仏側に拠って独・墺側と戦ったが、交誼はよくなかったといわれている。

3) ドイツ皇帝ヴィルヘルム 2 世やロシアの無政府主義者のバクーニンたちが黄禍思想の主唱者である。

4) 血液型別統計も載っているがミスが多い。

5) Blutgruppe は「血液ノ類属」と訳されている。

(1) 最初に記載したいのは、1926(大正15)年発表の平野林と矢島登美太による「人血球凝集反応ニ就テ」である⁶⁾。調査対象になったのは野砲兵第1連隊(東京駐屯)の兵士754人である。この研究は、兵士の身長、体重、同胞数、階級、懲罰や罹病の有無、色神異常など多面にわたる個人の特質と血液型との関連研究である。興味深い事実(注：それはある意味では滑稽であるが)をあげてみよう。

身長の高い兵士にはO型とAB型が多い。B型にも優秀な兵士が多く見られる。AB型には懲罰を受けた兵士はいないがB型には多い。B型は罹病しやすい。AB型には色神異常が多い。

このような研究がなんの役に立つのか疑問である。

(2) この研究に続くものが、1927(昭和2)年に発表された中村慶蔵の「血液種族ト兵卒ノ個性ニ就テ」である。血液種族とは血液型のことである。この研究は歩兵第18連隊(愛知県豊橋駐屯)の兵士1,037人を対象にし、兵士の食物嗜好、性格、学科成績、懲罰や罹病の有無など多面にわたる個人の特質と血液型との関連研究であるが、詳しい内容は残っていない。この連隊は、1931(昭和6)年にも2,037人についての血液型個性研究を行っていたそうである⁷⁾。

(3) 3番目に取り上げる研究は、中村と同じころに発表された坪倉利の「歩兵第12連隊兵卒ノ血液型ニ就テ」である。この連隊は香川県丸亀駐屯であるが、地域的に血液型の分布に偏倚があったとは思われない。坪倉の報告は明らかに誤謬である。次の資料の括弧内の数値は修正したもので、彼の研究でわかっているのはこの人数だけである。

A型351人、41%(351人、40.1%)、B型170人、20%(170人、19.4%)、O型84人、9.3%(264人、30.2%)、AB型264人、29%(84人、9.6%)、不明6人、0.7%(6人、0.7%) (注：坪倉の報告ではO型は古い呼称でC型になっている)。

軍医たちの粗雑な研究は、1930(昭和5)年あたりから脱皮的に変貌してくる。古川竹二の血液型気質

相関説の影響である。

3. 古川竹二と血液型性格

古川竹二は1891(明治24)年12月1日、長崎県に生まれている⁸⁾。家は医家で父親も医師、祖先は九州大村藩の薬師、つまり医師だったという。古川は難聴だったので医科への進学を断念したといわれている。彼が血液型研究に没入したのも欲求不満の代償行動ではないだろうか。

古川は東京帝国大学文科大学(現在の東京大学文学部)の哲学科(教育学専攻)に在籍し、卒業論文は「独逸ノ普通教育ニ於ケル宗教科ノ沿革」である。血液型とはほど遠いテーマである。彼は大学院に進学したが、ここでも血液型とは無縁で教育史の研究、特に女子教育の研究に熱を注いだそうである。

それが機縁になったのか、1917(大正6)年から東京女子高等師範学校(現在のお茶の水女子大学)に勤めることになる。勤めたのが院生時代だったので最初は教育研究部の嘱託、その後、英語担当の訓導になり、やがて講師、教授に昇格する。そしてここが古川の生涯の職場になり「血液型気質相関説」の発祥の地ということになる⁹⁾。

古川と気質 古川は気質という概念を使い、心理学者は気質・性格・パーソナリティ・人格などの概念を文脈にしたがって使いこなしている¹⁰⁾。古川の理論をコピーした能見正比古は「性格には気質という生まれつき、先天的なものと、しつけとか育ちの差などの後天的な影響の2つの要素がある。その後天的な差だけでも、当然、性格は違ってくる」とし、気質と性格という概念を文脈によって使い分けている。ただ、どちらかという性格という語が多く使われている。気質という概念が大衆になじまないからであろう。

古川は、全人的要素を身体と精神に分け、さらに精神を知能・感情・意志に3分し、それらのうち感情と意志を気質としている。気質は血液型4型、詳

6) 平野と矢島の研究は、日本の陸軍における最初の血液型個性研究で、『軍医団雑誌』157号に掲載されている。

7) これらの研究については、松田薫の前掲書の99-101を参照されたい。

8) 佐藤達哉・渡邊芳之『日本性格心理学第3回・第4回発表論文集』1994, 1995を参照されたい。

9) 「血液型気質相関説」は古川の命名ではないといわれている。

10) 心理学では概念規定が曖昧なところが多い。大村政男『改訂新版：図解雑学 心理学』ナツメ社2006の第6章「人格心理学」を参照されたい。

左ノい組トる組トヲ矢ノ方向ニ読ンデ自分ガ属シテ居ル ト思ハレル組ニ(○)ヲオツケ下サイ。 若シ他ノ組ニモ特ニ当ツテルノガアツタラ、ソノ事項ダ ケニ○ヲオツケ下サイ。	姓名 年齢 歳
← () い組 一、物事ヲ苦ニシナイ方 二、諦ガ早イ方 三、人ノ前ニ出ルノヲ大 シテ苦ニシナイ方 四、引込思案デナイ方 五、事ヲ決スル時躊躇シ ナイ方 六、陽性ノ方 七、ヨク人ト交ル方 八、キカヌ氣ノ方 九、他カラノ刺戟ニ動カ サレナイ方 一〇、自分ヲ枉ゲナイ方 一一、粘バリ強イ方(意志 ガ強イ方)	← () ろ組 一、オトナシイ方 二、取越苦勞ヲスル方 三、諦ガ遅イ方 四、人ノ前ニ出ルノヲ苦 ニスル方 五、引込思案ノ方 六、事ヲ決スル時迷フ方 七、内氣ナ方 八、感ジ易イ方 九、他カラノ刺戟ニ動カ サレ易イ方 一〇、自分ヲ強クハ主張シ ナイ方 一一、粘バリ強クハナイ方

Figure 1 古川竹二の自省表(第2案)(1928年使用)
 (備考) 自省表のなかに振り仮名を付けた文字があるが、実際には振り仮名はついていない。

しくはA(O)型, B(O)型を含む6型と密接な関連を
 持ち、加齢・境遇・教育の影響を受けて性格という
 ものに変容していくという。

血液型による気質の差異 古川は自分の血族の日常行動についての観察結果から、血液型と気質との関連を洞察したとのことである。1925(大正14)年ごろのことではないだろうか。彼は次のことを見出している。すなわち、A型は*passive*, B型とO型の両者は*active* というのである。AB型に触れていないのは、血族のなかにAB型の人がいなかったからである。

古川はこの発見を出発点としていわゆる自省表と呼ばれる質問紙を作成し、広範囲に実施し仮説(注: 古川は仮説と書いている)の証明に入っていくことになる。自省表という質問紙を使うことによって、それまで軍医たちが用いていた陳腐な枠組から抜け出すことになるのであるが、こんどは自省表の信頼性と妥当性、特に妥当性に縛られることになってしまう。

古川が作成した自省表には、プロトタイプ、第1案(1926年ごろ使用)、第2案(1928年ごろ使用)、第3案(1929年ごろ使用・陸軍騎兵学校用)、児童

用(1928年ごろ使用)の5種類がある¹¹⁾。ここでは古川が第2案を使って調査した(注: 彼は実験した——といている)結果を記述し、その主張を明らかにしようと思う。古川の第2案はFigure 1に掲げたとおりである。被験者は17歳から22歳の女性群(東京女子高等師範学校生徒を主とする)683人、27歳から72歳の男女群(注: 古川の同僚・高等師範学校の卒業生を主とする)202人である。古川はこれらの被験者に上に掲げた自省表を与え、回答させていくのである。

Figure 1の「い組」と「ろ組」は、第1案では*Active*を表わす「A組」と*Passive*を表わす「P組」と名づけられていたものである¹²⁾。古川はB型とO型の人は「い組」を、A型の人は「ろ組」を選ぶはずである、そしてAB型の人は外面はB型的で内省はA型的なので、外面として「い組」、内省として「ろ組」を選ぶはずだと考える。この古川の仮説は願ったり適ったりの結果を得ることになる。A型・B型・O型の人についてはひとまず理解できるが、AB型の人は外面と内省をどのようにしてとらえるのであろうか。

古川が発表した結果をTable 1に示しておこう。

11) 自省表のいろいろなタイプについては、大村政男『血液型と性格』福村出版1990の「2 性格検査と血液型性格学」を参照されたい。

12) 古川は、*active, passive* とすると価値判断が生じるおそれがあると考えたので、「い組・ろ組」としたとのことである。

Table 1 自省表（第2案）の結果

	一致数（人数）		一致率（%）	
	17～22 歳	27～72 歳	17～22 歳	27～72 歳
A 型	203/270	71/77	75.2	92.2
B 型	82/154	42/45	53.2	93.3
O 型	163/204	57/60	79.9	95.0
AB 型	45/ 55	18/20	81.8	90.0
A 型	下段ろ組 1～ 7（7 項目）			
B 型	上段い組 1～ 7（7 項目）			
O 型	上段い組 8～11（4 項目）			
AB 型	外面い組・内省ろ組			

この Table 1 の資料はそのまま受容しなければならないが、いちおうコメントしておこう。17～22 歳までの AB 型 55 人のうち 45 人が、自分は外面がい組で内省はろ組だとしている。27～72 歳までの AB 型ではどうだろうか。20 人のうち 18 人が、自分は外面がい組で内省はろ組だとしている。AB 型の一致率については十分納得できないが、A・B・O 3 型の一致率については理解できないこともない。しかし、古川は 17～22 歳の被験者の一致率が 27～72 歳のそれよりも低率なことについては、「即ち此の時代は、人生に於ける第 2 の誕生と呼ばれる、青年期であり、身体上に於て重大なる変化がある如く、精神上に於ても *Sturm und Drang* の時代であり、Platon の所謂、精神的醜悪者の時代である為に自己の気質の内省に困難を訴るものが多くあったからである（原文）」と解説している。牽強附会之感がしてならない¹³⁾。

血液型 4 型の気質 古川は Table 1 の結果を押しひろげて、血液型 4 型の気質の特性を次のように記述している。科学は *nomothetic* な性質を持つものではあるが、なにか無理を重ねている感がある。

A 型気質 遠慮深い人、内気な人、温厚な人、物事が気にかゝる人、物事を決する時迷う人、用心深い人、深く感動する人、人より争う人、自分より犠牲にする人。

B 型気質 気軽でアッサリした人、物事を長くハ

気しない人、物事に執着する事が少ない人、快活にシテヨク談ズル人、刺戟が来ると直ぐ之に反応する人（敏感）、気軽に人と交る人、人の世話ナドヲ心好くスル人、物事にヨク気ノツク人、事ヲナスニ派手な人。

O 型気質 落付イテル（被暗示性ノ少イ人）、感情ニ駆ラレナイ人、物ニ動ジナイ人、キカヌ気ノ人、人ニ余リ左右サレナイ人、精神力ノ強イ人、事ヲ決シタラ迷ハナイ人、意志ノ強イ人（根気ノヨイ人）、オトナシ相デモ自信ノ強イ人。

AB 型気質 外面ハ B 型デ内省ハ A 型、内ト外トガ異ッテ居テ判断シニクイ人。

古川はこの記述に続いて、「雑型の A(O) と B(O) とは間接に遺伝上から明らかにすることが出来るもので、凝集反応の上からは A(O) は A に、B(O) は B に含まるゝ……」としている。

団体気質（団体活動性指数） 古川は A 型と AB 型が *Passive* で、B 型と O 型が *Active* だったことから、ある集団内の血液型の出現率から団体気質（団体活動性指数）という指標を作成している。団体気質の公式は次のとおりである。

$$\text{団体気質} = \frac{\text{Active}}{\text{Passive}} = \frac{A}{P} = \frac{B\% + O\%}{A\% + AB\%}$$

古川はこの団体気質が 1.00 ならば活動性が中庸であることを示し、それを超えるとそれに従って活動が活発化してくる。ただし、2.00 を超えると統制のとれない集団になってしまうという。逆に 1.00 未満になるとその程度によって活動は鈍くなるというのである。しかし、この公式は血液型 4 型の持つ気質が古川のいうとおりならば成立するかもしれないが、彼の研究結果から見てもどうしても理解しにくい。次の Table 2 は古川があげている団体気質の見本である。

かつての日本陸軍の將軍や高級参謀を養成した陸軍大学校の卒業者の団体気質は 2.09 である。無知的暴力犯の団体気質は 1.94 である。古川は石橋無事の資料を引用し、団体気質の数値で犯罪人に積極的気質者が多いことを示しているが、100 人が団結して行動したわけではないから、ここで団体気質を持ち出すのはナンセンスである。また、陸軍大学校の出身将校の団体気質が 2.09 なのになんのコメントもしていない。2.00 を超えたならば統制のとれない

13) *Sturm und Drang* の時代とは「疾風怒濤」の時代と訳されている。心理学上のことばではなく文芸史上のことばで、理性中心の文学から感性中心の文学への転換を意味する。静かな児童期から性に目覚める青年期への変化にたとえられる。

Table 2 団体気質の見本

調査対象		A 型 (%)	AB 型 (%)	B 型 (%)	O 型 (%)	団体気質
陸軍大学校出身将校	34 人	29.4	2.9	14.7	52.9	2.09
無知的暴力犯	100 人	27.0	7.0	19.0	47.0	1.94
日本人	20,297 人	38.2	9.6	21.2	31.0	1.09
台湾の先住民	658 人	26.9	6.9	22.2	44.0	1.96
アイヌ人	5,214 人	35.6	10.4	26.1	27.9	1.17
欧米理想国人	24,917 人	40.5	4.1	10.6	44.8	1.24

Table 3 血液型の地域的・人種的変動 (%)

調査対象	A 型	B 型	O 型	AB 型	調査された人数
イギリス人	43.4	7.2	46.4	3.0	500
アメリカ人	36.0	14.3	44.5	5.2	5,000
フランス人	43.8	10.6	43.1	2.5	500
スペインのユダヤ人	33.0	23.2	38.8	5.0	500
イタリア人	42.1	11.6	42.0	4.3	1,932
ドイツ人	44.4	12.6	38.4	4.6	17,982
ポーランド人	39.0	20.6	32.6	7.8	12,638
ロシア人	38.4	21.3	34.6	5.7	2,107
フィンランド人	38.2	16.1	40.7	5.0	2,087
トルコ人	38.0	18.6	36.8	6.6	500
インド人	24.5	37.2	30.2	8.1	2,357
安南人 (ベトナム人)	22.4	28.4	42.0	7.2	500
中国人	31.4	27.3	32.6	8.7	4,428
朝鮮人 (現在の北鮮地域)	27.4	34.5	30.5	7.6	354
朝鮮人 (現在の韓国地域)	36.0	29.5	23.7	10.8	773
日本人	38.2	21.2	31.0	9.6	20,297

(注) 原資料は主として古川竹二の『血液型と気質』から採っている¹⁶⁾。

い集団になるはずではなかったのか¹⁴⁾。

古川は、さらにアイヌ人と台湾の先住民 (注: 古川は台湾蕃人としている) との団体気質を比較している。彼は、アイヌ人の団体気質が 1.17 なので内地人の圧迫に抵抗することがなかったが、台湾の先住民は団体気質が 2.00 といってもいい強さなので、しばしば激しい暴動を起こしたと説明している。なお、興味深いことに、古川は英米独仏の 4 国民を欧米理想国人と呼び、日本人を訓育でそのレベルに近づけたいと願っていた。彼は最初に国際結婚による人種改造を考えていたが、それは無理なので訓育の力によることを提案したのである。台湾先住民の O 型を減少させるために日本女性との結婚も考えていたのだから驚かされる¹⁵⁾。

生物化学的人種指数と団体気質 1919(大正 8)

14) 日本陸軍の将校や高級参謀たちは相互に対立していたので、この団体気質は当たっていたのかもしれない。

年、ポーランドの医師 L. & H. Hirschfeld (注: 以降、Hirschfeld 夫妻とする) は、第 1 次世界大戦でヨーロッパに集結した 16 カ国の兵士約 8,000 人の血液型検査をしている。この検査で A 型がヨーロッパに多く、中近東を経てアジアに移るにつれて A 型は少なくなり、逆に B 型が多くなることが発見されたのである。O 型や AB 型の推移には目立ったものがなく、A 型と B 型に著しい変化があったのである。白人の人種差別に格好の材料を与えたことになる。Table 3 は Hirschfeld 夫妻の資料そのままではないが、血液型の地域的・人種的変動を明瞭に示している。

15) 古川は本当に人種間の結婚を考えていたようである。英米仏独を理想国人とするような考え方は、いまでも生きているのではないだろうか。

16) このような統計は調査された人数によって大きく変動してしまう。イギリス人やフランス人などが 500 人で代表されるであろうか。

A型の西高東低とB型の東低西高を数量的に明らかにしたのはHirschfeld夫妻の研究の成果であるが、彼らはこの事実を踏まえて「生物化学的人種指数(biochemische Rassenindex)」という指標を作成した。この指標は次の公式によって算出されるが、A型とB型だけが注目されているところはやはり白人社会の産物である。

$$\text{生物化学的人種指数} = \frac{\text{A型}\% + \text{AB型}\%}{\text{B型}\% + \text{AB型}\%}$$

イギリス人の人種指数は次のとおりである。

$$\frac{43.4 + 3.0}{7.2 + 3.0} = \frac{46.4}{10.2} = 4.55$$

日本人の人種指数は次のようになる。

$$\frac{38.2 + 9.6}{21.2 + 9.6} = \frac{47.8}{30.8} = 1.55$$

Hirschfeld夫妻はこの指数を次のように3分している。日本人は境界人的な領域に入っている。

指数が2.0以上の人種 ヨーロッパ型

指数が1.3以下の人種 アジア・アフリカ型

指数がこれらの間にある人種 中間型

日本人はアジア・アフリカ型には入りたくないが、境界人的な地位にも不快感を示す人種である。日本人は欧米のブランド好みで、ヨーロッパ型になりたいというこだわりは陸海軍においても強かったようである¹⁷⁾。

Hirschfeld夫妻の指標にはO型の人数(%)が含まれていない。このO型に注目したのが古川竹二である。彼が工夫した団体気質(団体活動性指数)は当初「民族性係数」と名づけられたことからしても西欧の白人社会中心の生物化学的人種指数への対抗であったことはいままでのことであろう。Table 4は、生物化学的人種指数と団体気質とを対応させたものである。

人種指数は生物化学的なもので信頼性も高いが、団体気質は心理学的なものである。真に役立つ指標になるであろうか。

古川学説の海外進出 古川竹二の論文は、1928年に刊行されたドイツの有名な雑誌に掲載されている。その雑誌は„Zeitschrift für die angewandte Psychologie“のBd. 31で、詫摩武俊によると、こ

17) この記述は注の15とも関連している。なお、岩波浩(海軍兵学校の軍医)は、兵学校の生徒のある集団に「ヨーロッパ型」を見出している。

Table 4 人種指数と団体気質の対応

調査対象	人種指数	団体気質
イギリス人	4.55	1.16
アメリカ人	2.11	1.43
中国人	1.11	1.49
日本人	1.55	1.09

の雑誌は非常に見識の高い学術誌で古川の業績が評価された結果ではないか—とのことである。古川の論文名は次のとおりである。

Die Erforschung der Temperamente mittels der experimentellen Blutgruppenuntersuchung.

この論文にも先駆者の原来復のことは出ていない。どうしてであろうか。なお、その後この論文は注目評価された形跡は見られない。ドイツ人好みの体質論なのにどうしてであろうか。

古川の論文は1930年に刊行されたアメリカの雑誌にも掲載されている。その雑誌は“The Journal of Social Psychology”のVol. 1, No. 4で、論文名は次のとおりである。

A Study of Temperament and Blood-groups.

この論文もアメリカでは注目評価されていない。アメリカの学風はドイツの体質論と違って環境論だからかもしれない。ただ、アメリカでは血液型占いなどは問題にされていないが、星占いには人気が集まっているという。どういうことであろうか。

4. 古川学説に対する牛島・依田の批判

古川が、日本心理学会の機関誌『心理学研究』の2巻4輯に、血液型と人間の個性についての最初の論文「血液型による気質の研究」を掲載したのが1927(昭和2)年である。その後、古川は文字どおり論文を書きまくるわけであるが、1932(昭和7)年に、とうとうそれまでの研究をまとめて『血液型と気質』という単行本にして東京の三省堂書店から上梓している。

それまで『心理学研究』などに古川が掲載した論文について心理学界は静謐を保っていたが、この本

の出版で急に騒がしくなってしまう。のちに学界の指導者の1人になる牛島義友（当時26歳，立教大学文学部教授）は、『心理学研究』の7巻2輯で次のような書評をしている（要約）。

「近時の心理学的研究のうち，血液型と気質の問題ほど有名になったものはないと思う。著者が一部学者の偏見に厄されて激しいジャーナリスティックな迫害を受けたことは周知の事実である。研究論文としても科学的読物としても非常に興味深い。しかし，本書においては統計的論証が詳細なのに反し，個人における血液（注：型が抜けている）と気質との関係についての記述が少ない。この因果関係が統計的に確認されたとしても，それをただちに個人の訓育や適性検査などに応用することは尚早のおそれがある。」

依田新（当時27歳，東京文科大学助手）は，東京文科大学編『教育心理研究』の7巻5号に書評を寄せている。牛島は柔軟な性格の人だったが，依田は硬骨な人で，いわゆる進歩的な社会思想のことで物議をかもしたことがあったという。のちに牛島とともに学界の指導者の1人になった。書評の一部を掲載しておこう。

「著者は千数百名の気質判断を集め，O型とB型とは積極的，A型とAB型とは消極的という著しい相関を報告している。次にいろいろな団体や地方的気質，それから民族性について触れている。そして，最後に家庭や学校における訓育に関して血液型をいかに応用するかについて述べている。通読後の率直な感想をいえば，血液型と気質との相関をこのような単なる応用的検証によってではなく，この仮説を他の面からさらに検証していくことが必要である。」

この2人の書評を評価してみよう。

牛島は，古川が詳細な統計的論証に力を入れ，個人の問題に触れていないといっているが，現代の心理学研究のほとんどすべてがそのような方略を採っているのではないか。*nomothetic*な思考は科学の根幹で，心理臨床の領域でしばしば報告されているケース研究，すなわち *idiographic* (*idiosyncratic*)なスタンスは，ある特定の個人の理解にしか役に立たないのである。

現代の心理学研究は推計学的知識の使用によって *nomothetic*な思考を墮落させていることも事実であるが，古川の時代は主観的・目分量統計の時代な

ので問題も大きい。

依田も古川の *nomothetic*な方法を突いている。相関を求めるのは *idiographic*なスタンスではできない。どうしても *nomothetic*な思考によることになる。依田のいう「この仮説を他の面からさらに検証していくことが必要である」とはなにを意味しているのだろうか。心理学者は人間の皮膚から内側には入ることができないのである。

それでは，古川は一般的な疑問に対してどのように応えているのだろうか。

5. 古川が批判に応える

ここでは、『血液型と気質』の末尾にある「拙論の批評に対して」の重要な部分に触れることにする。

科学的根拠はどうか 多くの批判者は，血液型と気質の関係が科学的に証明されていない，そこで実際問題に適用するのは控えたほうが良いという。しかし，E. Kretschmerの研究でも「体格と性格(Chrakter)」について内分泌腺の機能をベースにした説明にとどめているではないか。科学的証明とはなんなのか。

気質に善悪はない 日本人は，気質や性格といえただけに善悪優劣と結びつけてしまう。女性はO型やB型であることを好まないし，男性はA型であることをよるこばない，これは誤りである。古川はこのようにいっているが，大衆の偏見は固定的である。B型は血液型発見の当初から蔑視され，AB型は「二重人格」であるかのように誤解されている。

被験者は量より質 血液型と気質の相関を研究するとき，ただ単に自省表を配布して回答を求め，それで被験者が自分の気質を正しく報告できたとするのは早計である。

古川のこの意見は正しいと思う。現在の心理学的研究はすべて——といっているほど，大学の大きな教室における講義時間内の収穫である。古川も自省表を実施するとき学校の教室を利用している。そして自省表について十分に説明したそうである。

私たちは，古川の学説の内容を多くの被験者がよく知っていて，不知不識のうちに追従してしまった——と告白した人がいたことを覚えている¹⁸⁾。

18) 私たちは，当時東京女高師で古川の調査に被験者として参加していた人から，そのときの状況を聴いている。被験者は古川学説に協調したのだ。

採用人事についての注意 血液型によって気質や性格がうかがわれるからといって、身体や知能を無視してもいいという理由はどこにもない。世間には事実を大袈裟にいたり、間違っただけで受け取る人がいて迷惑である。古川はたしかに制御しながら自己の学説を発展させたと思うが、現実はだんだん拡大解釈に走ってしまっている。古川の没後約30年も経て、この傾向は大增殖することになってしまう。

血液型は体質型である 血液型は単に血液の型だけでなく、人体の各部位のすべてにおいて見出されている。そこで体質型、あるいは吉田寛一のいうように人間型と呼ぶのが適当である。内分泌の分量が気質に影響することはもちろんだと思うが、それよりもむしろ気質の差を規定するものは、内分泌の質の相違ということになるのではないかと思う。

同型者の気質間の相違について 気質の区別は人びとが明らかに認めるとはいえ、それは相対的なものである。感情も意志もすべての人が持っているが、それらの特徴のある型の人には比較的多く行動に表わし、他の型の人には別な特徴を多く表わすことの相違である。

例えば、桜の花だけを集めてそれらを比較しても、その間にさまざまな相違が観取される。しかし、桃の花と比較すれば容易にその差異を識別することができる。それと同じで、A型同士を集めた場合、その間に少しずつの気質の相違が見られるが、O型やB型の人と比較すればその差は著しいものがあることがわかる。それと同じである。

古川のこの比喩は非常に優雅だが、能見正比古のコピーは作家といってはいるがうまくはない。いちおう参考資料としてあげておこう。

「牛肉の料理がどんなに多様でも牛肉料理は牛肉料理であって、魚料理とも野菜料理ともはっきりと区別される。料理のタイプを問わず、牛肉の持ち味はいたるところに残される。性格のほうもO型の性格が、どんなにバラエティを見せても、O型の気質の持ち味、その特色は、性格のあらゆる局面に、濃淡の差はあってもはっきりと現われてくる。それはA型性格とも、B型性格とも、明瞭に区別されるものである。」¹⁹⁾

19) 能見正比古はいたるところで古川の学説を模倣している。しかも自分が「血液型性格学」の創始者のような筆法をとっている。

O型の気質について O型は、感情に駆られない人といったのは、理知的で感情を抑えることができる人ということである。つねに自分を失わない人であり、被暗示性の少ない人である。なお、O型のなかには、一見おとなしい、物事を気にかける用心深い、ちょうどA型的に見える人や、社交的でB型的に見える人もいる。しかし、O型に共通するところは「キカヌ気・自分ノ考ヘヲ枉ゲナイ」ということである。

小学校児童の気質調査について 古川はここで自分の生徒（注：東京女子高等師範学校の生徒）が連れてきた2人の児童（兄弟）の行動について記述している。

古川はその兄弟の姉に、その兄弟が父親に叱られたときどういう行動をとるかについて尋ねている。

兄のほうはしょげて、黙りこんでしまう。

弟は「僕ばかりが悪いんじゃない」と口答える。

古川はこの2人の気質検査をした結果、兄はA型、弟はB型だったそうである。

古川がどんな気質検査をしたかは記述されていないが、彼は児童の気質検査について次のような注意事項を書いている。

(1) 気質の問題に興味を持っている両親や兄姉たちから、その児童の気質に関する偽りのない報告を得ること。

(2) 児童の気質観察には児童用の観察表を作成して実施することが必要である。

批評点の相違と気質研究者自身の問題 評論家が医学問題について批評するとき、一般に治癒率を重視している。しかし、気質問題について批判するときは不一致、すなわち、例外ばかりをあげて反論を展開する。気質問題は単純ではない。その人の境遇や教育の影響も考慮しなければならない。気質問題に100%の一致率を要求することは無理であろう。

なお、なにごとに対しても苦労したことのない事柄に対しては、その機微に通じがたいものである。すなわち、あまりにも若い人は人を見る眼がないものである。また、児童の気質を知るためには、その児童ほどの年齢の自分の子どもを育てた経験があることが必要である。

古川のこのことばは痛烈な忠告である。しかし、そうなると乳幼児を育てたことがない女性は発達心理学がわからないし、企業体に勤めた経験のない人

は産業心理学を実感することができない、そういうことになってしまう。古川のことは拡大解釈すればそうになってしまうのである。そういうことでのいいのだろうか。

6. 古川が「児童研究」を阻止される

1928(昭和3)年6月21日付の『東京朝日新聞』は、「児童の気質調べに奇怪な血液検査 小石川窪町小学校の保護者から嚴重な抗議申込み」,「あやふやな学理 児童教育上にも保健上にも由々しい大問題」という大きな見出しを掲げている。古川竹二は児童を調査しようとしたが果たされなかったのである。それでは、なぜ児童を被験者にと考えたのであろうか。

古川は血液型と性格との相違を追究しようとしたのではなく、血液型と気質との相関を追究したかったのである。気質は生得的なものと理解されている。その気質が生後の環境的条件によって変容したのが性格と呼ばれるものである。古川は性格の生地ともいべき気質を探りたかったのである。乳幼児や小学校低学年がいちばん適当だが自省ができないので、どうしても小学校の高学年になってしまう。そこで、彼は小学校5・6年生を目標にして血液型と気質の相関を追究しようとしたのである。それが児童の保護者たちによって阻止されてしまう。

この原因は、保護者側の抗議よりも古川側の失策にある。古川が自分で血清を用いて血液型検査をしたからである。しかも手指の消毒もしないでメスを入れたので、保護者からの抗議、反発が出たのは当然なことであろう。

児童を被験者とする研究が阻止された古川は、途方にくれてしまう。そのとき彼に救いの手が差し伸ばされる。ここで古川は研究の方向を大転回することになるのであるが、ただ、この大転回は古川の意図とはまったく関係なく起こっている。日本陸軍で最も進取的と評価された騎兵学校からの血液型気質研究の依頼がそれである。

7. 軍隊における血液型個性研究(Ⅱ)

古川は、1928年の夏ごろから騎兵学校の兵士についての研究に着手することになる。この学校は、騎兵科という戦闘集団の下士官を養成する機関(教導隊養成機関)である。

Table 5 騎兵科将校と輜重科将校の比較

調査対象		A型	B型	O型	AB型	合計
騎兵科将校	N	24	19	28	4	75
	%	32.0	25.3	37.3	5.4	100.0
輜重科将校	N	6	2	2	0	10
	%	60.0	20.0	20.0	0.0	100.0
日本人	N	7,753	4,303	6,292	1,949	20,297
	%	38.2	21.2	31.0	9.6	100.0

古川はまず騎兵科の将校75人の血液型を調査し、輜重科の将校10人の血液型と比較している。騎兵科というのは、乗馬して敵陣に斬り込んで敵方を攪乱し、味方を勝利に導く勇敢さを必要とする兵科である²⁰⁾。これに対して輜重科というのは、戦闘地域に武器・弾薬・糧食などを輸送することを任務とする兵科で、民間でいえば運送業者である。騎兵科と違って堅忍不拔の持久力が求められる。

Table 5は古川が作成した資料を修正したもので、騎兵科の将校には勇敢さを必要とするO型が目立ち、輜重科の将校には忍耐さを必要とするA型が多くなっている。古川はこのとき自省表を実施したわけではない。血液型だけで結論を出しているのである。これはどう考えても無茶な論理である。古川が想定しているように、A型の人は必ずA型気質を持ち、O型の人は必ずO型気質を持っているならば簡単であるが、事実はそうではない。Table 1の自省表(第2案)を用いた統計資料によってもA型では75.2~92.2%の一致率、O型では79.9~95.0%の一致率しかないのである。ここで90.0%以上の一致率が見られるのに私たちが積極的な支持をしなかったのは、すでに触れたように古川学説の内容を知っている人たちの資料だったからである(注の18参照)。信念は研究を続行するためにはきわめて必要なものであるが、それはしばしば結論を歪めてしまう危険性がある。

古川の血液型個性研究は、海軍の軍医たちにも影響を及ぼしている。1932(昭和7)年に岩波浩が「海軍兵学校生徒の血液型と諸観察」という論文を発表

20) 騎兵科という兵科は現在は存在しないが、アメリカ陸軍には「第8騎兵師団」という部隊がある。かつて功績があった部隊なので、記念として名称が残っているだけで別に馬匹は利用されていない。

Table 6 海軍兵学校生徒 10 分隊の団体気質

分隊	A 型 (%)	B 型 (%)	O 型 (%)	AB 型 (%)	団体気質
2	62.5	12.5	12.5	12.5	.33
3	53.1	18.7	18.8	9.4	.60
4	26.3	20.2	53.5	0.0	2.80
5	50.0	12.5	28.1	9.4	.68
7	43.7	25.0	18.8	12.5	.78
10	53.1	15.6	28.2	3.1	.78
11	62.5	15.6	18.8	3.1	.52
13	28.1	21.9	40.6	9.4	1.67
15	37.5	18.8	25.0	18.7	.78
16	34.5	27.8	34.5	3.2	1.65

している。岩波は、生徒 149 人の生物化学的人種指数を計算して 1.84 を見出している。しかし、奥羽・関東地方の出身者 38 人では、指数は 2.00~2.28 のヨーロッパ型になっている。次に団体気質であるが、Table 6 に見るように 10 分隊のうち 7 隊はそれが 1.00 未満なのである。海軍兵学校の生徒は、古川のいう *passive* な集団ということになる。岩波はこれに関して、東京女高師の理科の生徒の団体気質が 1.00 未満であることを引用している。すなわち、文科の生徒の団体気質が 1.34 なのに理科の生徒のそれは 0.93 なのである。

岩波は、文科の生徒の気風は独立的で、なにごとにもとらわれない、そして団結力がない。しかし、理科の生徒の気風は、従順、真面目、よく協力一致する——という古川のことばを引用している。岩波は、海軍兵学校の生徒は理科的だから団体気質が 1.00 未満でいいとするのである。それでは、1.00 以上の団体気質を持っている分隊はどうなるのであろうか。4 分隊のごときは、団体気質は 2.80 である。2.00 を超すと統一性のない集団とのことである。このことを岩波はどう説明するのであろうか。

岩波浩の結論も牽強付会なら、高原武一のスタンスはまったく神懸りのである。軍医なのに神懸りなのである。当時の歴史教育は神懸りだったから仕方がないかもしれない。

高原は、1930(昭和 5)年に「山陰地方出身隊兵ノ血液型」という論文を発表している。この論文は、鳥取県と島根県出身の兵士 1,352 人の血液型を調べ、その生物化学的人種指数が 1.65 (鳥取 1.59, 島根 1.73) であることを根拠として、朝鮮人 1,127 人の人種指数 1.05 とは違うのだと主張するのである。高原は「所謂出雲民族発祥地方人 (注: 鳥取・島根

Table 7 井上が構成した血液型部隊の一部

調査対象	班長の血液型	隊員の血液型			
		A 型	B 型	O 型	AB 型
第 1 班	B 型		14	5	1
第 2 班	A 型	9			5

両県の住民を指す)ノ血液型ハ天孫民族発祥地方ノ血液型ト同様ニシテ古来ヨリ交通頻繁ナル朝鮮人トハ著シキ混血ナキコトヲ示シ我日本民族ノ起原ニ重要ナル暗示ヲ与フルモノト謂フベシ」とまとめている。恐るべき論理である。

岩波と高原の次に井上日英の「血液型部隊」をあげておこう。井上は、1934(昭和 9)年に「血液型別ニ観察シタル軍隊教育ノ成果ニ就テ」という論文を発表している²¹⁾。井上は、世界で最初、しかも最後の血液型を応用した部隊を編成したのである。しかし、このような企画は長くは続かなかった。日本が中国の北東部に満洲国という傀儡国家を建国し、当時わが国の植民地だった朝鮮半島の防衛地帯にしたからである。この国策がやがて太平洋戦争という大戦争の遠因になってくる。O 型の陸大出の軍人の *active* な行動かもしれない。

井上の血液型部隊は、O 型と B 型は *active* であって、A 型と AB 型は *passive* であるということをもそのまま呑みにしたものである。Table 7 は、その一部を示したもので、井上は得意だったと思うが、企画は日本陸軍の伝統を無視したもので短期間で終わっている。

Table 7 は、井上の血液型部隊のうち 2 群の班 (注: 軍における最小の集団) を見本として表示したものである。第 1 班は班長が *active* な B 型、隊員 1 人を除いて 19 人が *active* な B 型と O 型である。第 2 班は班長が *passive* な A 型、隊員 14 人のすべてが A 型か、AB 型である。第 1 班は活発が、第 2 班は忍耐力が特徴になる。しかし、そうは簡単にはいかないのではないだろうか。

8. 結 語

心理学会で「血液型」に関連した発表をすると誤

21) この詳細については、大村政男『新訂 血液型と性格』福村出版 1998 を参照されたい。

解されることが多い。多くの心理学者はまず巷間にあふれている通俗本を脳裡に描いてしまう。この論文は多くの心理学者に血液型の心理学的研究に正当な認知をしてもらいたいために書かれている。なお、心理学では、気質と性格という概念の使い方が整然としていない。そこにパーソナリティや人格というような概念が入ってくるとさらに混乱する。この論文では、あるときは個性という語を使って混乱を避けているが、あまりすっきりした気持は持っていない。

参考文献

- 古川竹二 1932 血液型と気質 三省堂.
古畑種基 1962 血液型の話 岩波新書.
大村政男 1990 血液型と性格 福村出版.
詫摩武俊・佐藤達哉(編) 1994 血液型と性格 現代
のエスプリ 324 至文堂.
松田 薫 1994 改訂第2版「血液型と性格」の社会史
河出書房新社.

(受稿：2007.6.12, 受理：2007.10.16)
